

令和8年3月
京丹後市教育委員会

令和8年度 学校教育 指導の重点

「探究的な学び」の実現・充実による
グローバル人材の育成



- 問題解決能力
- 多様な他者と協働する力
- コミュニケーションツールとしての英語運用能力

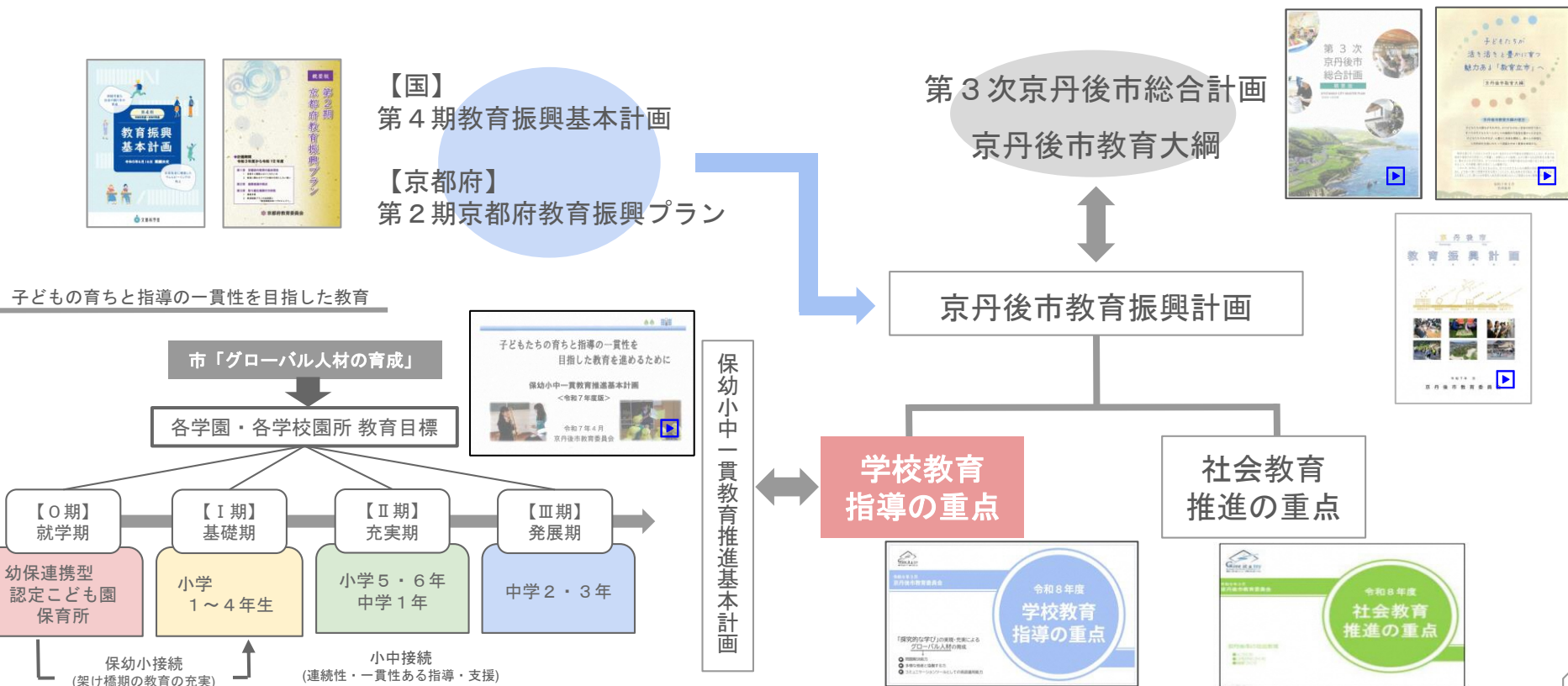
京丹後市教育委員会では、京丹後市総合計画・京丹後市教育大綱との整合をはかり、一人ひとりのWell-beingの向上を目指した新たな京丹後市教育振興計画を令和7年4月に策定しました。

本計画にあげられたプロジェクト1・2・3の実現に向けては、市内学校園所教職員で方向性を共有しての連携・協働が必要となりますので、この「学校教育 指導の重点」においては、市として目指す教育の方向性や令和8年度に重点的に取り組む内容を整理・記述しています。

上記のような目的で作成しているため、国や京都府教育委員会が示す教育・保育に関するすべての内容を網羅するものではありません。必要に応じて、より上位の法令・通知等も参照し、各校園所での研究・実践をより一層推進してください。

▶「京丹後市の新たな教育・人材育成のあり方に関する検討会（最終まとめ）」

※ 本資料内の「▶」をクリックすると、各関連資料のページへ移動します。



「社会を生き抜く力」をはぐくむ京丹後市の教育【全体イメージ】

グローバル人材育成

京丹後市として
重点化する資質・能力

- ✓ 問題解決能力
- ✓ 多様な他者と協働する力
- ✓ コミュニケーションツールとしての英語運用能力

3つのマインドセット

出典:一般社団法人SKY Labo



Think out of the box
型にハマらず発想する



Give it a try
ひとまずやってみる



Fail forward
つまづきことで飛躍する

探究的な学びを 繰り返すスパイラル型のプロセスが必要

「主体的・対話的で深い学び」
実現のための手法

子どもたちが「なぜ?」「どうすれば?」と考える問いを出発点に、
自分たちで解決策を探し、自分なりの解を見つける学び

ICTを効果的に活用した

個別最適な学び (学習の個性化・指導の個別化) ・協働的な学びの実現

すべての子の
学びと育ちを
保障する
【公教育の目指す姿】

個・集団のアセスメント
(状況把握・要因分析)

居場所づくり
(心理的安全性の確保)

すべての子に
「包み込まれている」という
感覚をもたらす
【教職員の取り組む姿勢】

教職員個々の資質・能力
及び学校力の向上

幼児期からの一貫した
「子ども自身が生活・学びの主体者である」
という揺るぎなき姿勢の堅持

学校・保護者・地域の
連携・協働体制の強化

◆はじめに◆

公教育を担う私たち教職員は、どのような役割・責任を果たすべきなのか。

1 公教育を担う教職員の責務

2 教職員個々の資質・能力及び学校力の向上

§ 1

教育の方向性

社会・教育に関する全国的な動向や本市の状況を踏まえ、本市では「**社会を生き抜く力**」の育成を教育・保育の柱とします。

- 1 VUCAの時代にも対応できる「社会を生き抜く力」
- 2 すべての教育活動で大事にしたいこと

§ 2

市として重点化する資質・能力（グローバル人材）

社会を生き抜くために必要となる資質・能力から**3つを重点化**し、その育成に向けた研究・実践を全市域で推進します。

- 1 市として育成を目指すグローバル人材
- 2 日々の教育活動の基盤となる考え方【3つのマインドセット】

§ 3

グローバル人材育成のための手段（探究的な学び）

目的である「グローバル人材育成」を実現していくためには、重点化された**3つの資質・能力と関連付けて**、「丹後学」をはじめとする**日常の教育・保育活動を構想・実施・評価していくことが必須**です。

- 1 個別最適な学び・協働的な学び
- 2 基盤①...個・集団のアセスメント
- 3 基盤②...安心できる居場所づくり

§ 4

保幼小中一貫教育の枠組みの効果的活用

「グローバル人材」として重点化された**資質・能力の育成には、中長期のスパンで計画的・系統的に指導・支援を積み上げていくことが必須**です。

- 1 幼児期からの一貫した系統的な学び
- 2 学園運営協議会の機能化による学校・地域の連携・協働体制の強化

◆はじめに◆ 公教育を担う私たち教職員の果たすべき役割と責任

1 公教育を担う教職員の責務

私たち教職員は、全ての子どもたちに対して公平かつ平等な教育の機会を提供し、学力の向上だけでなく、社会的・道徳的な成長を支援することが必要です。また、多様な背景をもつ子どもたちに対して、一人ひとりの個性やニーズを理解した上で、高い人権意識をもって指導を行い、差別や偏見のない環境づくりを促進することが重要です。

また、教職員一人ひとりが、教育・保育改革の推進者であるとの自覚のもとに変化を前向きに捉え、日々の教育・保育活動を主体的・組織的に推進し、市民の信託と期待に応えるために総力をあげなければなりません。昨年度、京都府内で発生した教職員による性暴力等の事案は、教育界全体の信頼を揺るがす深刻な事態です。この問題を「決して他人事ではない」と全員が強く認識しなければなりません。コンプライアンス意識を高める研修を徹底し、こうした事案を断固として根絶します。

[□「京都府公立学校教職員コンプライアンスハンドブック」](#) [□「教職員による性暴力等の根絶に向けて一信頼される教職員であるために一」](#)

§1 教育の方向性

1 VUCAの時代にも対応できる「社会を生き抜く力」

社会や経済、テクノロジーの変化が急激で予測しづらい現状においては、柔軟に対応し、変化に適応する力が求められます。

京丹後市では、一人ひとりの子どもが、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となる必要があると考えています。本市では、この力を「社会を生き抜く力」とし、その重点化する資質・能力を「グローバル人材」と位置付け、京丹後市の教育を推進していきます。

2 教職員個々の資質・能力及び学校力の向上

教育の本質は、教育基本法第9条第1項に規定されているとおり、教師は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に務めることが求められています。その時間を生み出すための働き方改革であることは忘れてはいけません。

さらに、学校園所が、学園及び学校園所の目標を実現したり、直面する様々な教育課題を克服したりできる組織として進化するために、教職員集団の多様性を活かした研究・実践を日常的・組織的に積み上げていくことも重要になります。

2 すべての教育活動で大事にしたいこと

- ◆様々な変化する時代を「教育を再構築するチャンス」と捉え、グローバル人材の育成を目指した研究実践を積み重ねていきます。
- ◆「誰ひとり取り残さない教育」を推進するため、個々の子どものアセスメントを丁寧に行い、発達支持的生徒指導の側面に重点を置いた働きかけをすすめます。
- ◆子どもたちの安心できる環境づくりのために、学校は家庭や地域と対話を重ねながら連携・協働を深め、地域全体で子どもをはぐくむ学校園所を目指します
 ※特に「自然災害（地震・雷）・熱中症・鳥獣害」への対策

§2 市として重点化する資質・能力 【グローバル人材】

社会が急速に変化し、世界がより深くつながる中で、子どもたちはこれからグローバル社会で生きていくことになります。このような時代には、多様な文化や価値観を理解し、他者と協力しながら、自分の役割を果たしていく力が必要です。

京丹後市が「グローバル人材育成」を教育の柱に据えるのは、子どもたちが地域に根差しながらも広い視野を持ち、世界とつながり、未来を切り拓いていく力をはくくむためです。

【巻末資料】1・2・3

1 市として育成を目指すグローバル人材

子どもたちがこれからのグローバル社会で自分らしく活躍するために、次の3つの資質・能力の育成を重視します。

●問題解決能力

主体的に問題を発見し、その解決方法を考え、実行に移し、振り返って次の問題の発見・解決につなげる力。子どもたちが「未来を創る主役」として活躍するための基礎となります。

●多様な他者と協働する力

異なる背景を持つ人々と共に学び、共感し合いながら共通の目的に向い、今まだないものを創り出そうとする力。子どもたちが自分のアイデンティティを大切にしながら、多文化共生の中で主体的に生きていくための基盤となります。

●コミュニケーションツールとしての英語運用能力

英語で考え、伝え、対話する力を育み、子どもたちが地域と世界をつなぐ架け橋として活躍できる力。その基盤となるコミュニケーション能力を、発達段階に応じた言語を中心に、すべての教育活動をとおして育成します。

2 日々の教育活動の基盤となる考え方 (3つのマインドセット)

子どもたちの主体性や意欲を引き出し、「グローバル人材」に求められる3つの資質・能力を育成するためには、教員自身が以下の3つのマインドセットを体現し、子どもたちにもその姿勢を意識付けていくことが大切です。



Think out of the box
 型にハマらず発想する



Give it a try
 つままずやってみる



Fail forward
 つまづくことで飛躍する

出典: センダ高野貴子・木島里江著「世界を象徴するTEAM人種—コンソシエ—「デザイン思考」の核心」朝日新聞(2019年)第3版
 【注意】一般社団法人SKY Laboの知的財産保護の観点から、ご使用の際は必ず出典もとを記載ください。

これらのマインドセットを定着させる鍵は、結果だけでなく「過程（プロセス）」を大切にしている教員の姿勢です。完成された成果物のみならず、つまづきや試行錯誤を丁寧に価値付け、葛藤の言語化を促すことで、失敗を恐れず学び続ける主体性をはぐくみます。

また、教員自身も試行錯誤を楽しみ、その姿を子どもたちに見せることで、教室全体を「失敗しながら学びを楽しむ」安心感のある場へと変えていきます。

子どもたちを「グローバル人材」として育成するためのリソース



- グローバル人材育成事業
Kyotango Sea Labo
海外派遣
オンライン留学
English Camp
English Day



- 京丹後市教育DXフェロー
との連携による事業
ICT機器の効果的な活用
教育DX促進のための取組

探究的な学びの充実 丹後学

ふるさと京丹後への愛着と誇り (人材リソースの活用)

教員の指導力 アップデート

- 丹後学モデルカリキュラム(令和7年度版)活用推進
京丹後市グローバル人材育成推進委員(チャンピオンズ)
- 「探究的な学びの充実」授業改善
京丹後市学力向上対策会議(研究協力員)
- 学びの変革プロジェクト 研究推進パイロット校
学校校務DXパイロット校・自立した学び手育成パイロット校
AI活用による授業づくりパイロット校
- 京都府教育委員会(丹後教育局)及び京丹後市教育委員会 主催各種研修会

- AIドリル
- AI英語発話
支援サービス
- クラウド型
プログラミング
教材

- 授業時数特例校制度
- デジタル教科書実証事業
- 育ちと学びをつなぐ架け橋
パスポート事業
- 府・市共同研究遠隔教育事業
- 京丹後市保幼小中一貫教育
学園授業研究会
- 学校における働き方改革
伴走支援事業



- 誰ひとり取り残されない
学びの多様化プラン
教育支援センターまわら
オンラインの居場所
各校内フリースクール(仮名)
オンライン匿名報告・
相談プラットフォーム



探究の4過程

- 整理・分析
・比較する・分類する・関連づける



ICTを基盤に



子ども主体の教育へ
子どもたちのわくわくから
始まる学びの変革
プロジェクト
■ふるさと納税を活用した、
ガバメントクラウドファン
ディングによる寄付金を募集
子どもたちや先生のやって
みたいを実現

保幼小中一貫教育

今、なぜ「探究的な学び」なのか。その答えは、市としてすべての子どもたちにはぐくみたいと考えるものが「グローバル人材」として表した3つの資質・能力だからです。一輪車に乗れるようになるには、実際に乗る経験を積まなければならないのと同じように、問題解決能力や協働性をはぐくむためには、子どもたちが問題解決の場面や多様な他者と協働する場面を数多く経験することが不可欠です。だからこそ、学習の主体者である子どもたち自身が「探究の過程」を繰り返しながら課題解決に取り組んでいく「探究的な学び」を、日常の保育・教育活動に積極的に取り入れることが重要だと考えます。

1 個別最適な学び・協働的な学びの一体的な実現

ICTやクラウド環境の活用により「個別最適な学び」や「協働的な学び」を加速させることが可能です。個別最適な学びにおいては、学習者一人ひとりの学習履歴や進捗に応じた教材や課題を柔軟に提供できるので、理解度に応じた効果的な指導が可能になります。一方、協働的な学びでは、リアルタイムでの意見共有や共同作業を促進するので、多様な視点を取り入れた学びを深める環境が整います。これら2つの学びを相互に往還し合うこと（＝個別最適な学び・協働的な学びの一体的な実現）で、すべての子どもの資質・能力を確実に育成します。



個別最適な学び

学習データの活用

クラウドに蓄積された学習履歴や成果をAI・データ分析で解析し、個々や集団の得意・苦手を把握して、適切な指導や支援を立案できます。

柔軟な教材提供

デジタル教材やオンラインリソース、AI技術搭載のドリル等を利用することで、学習者個々のペースに合わせた学びを提供できます。

AIの活用: 生成AIの利用ができる学習環境を整備することで、学習者個々の思考の活性化や即時フィードバック（※）が可能となります。
※子どものコメントにAIがその場で即助言



協働的な学び

非同期コミュニケーションによる協働

クラウドベースの各種ツールを利用することで、リアルタイムでの意見交換や共同作業が可能となります。

多様な意見の共有

クラウド環境を活用することで、異なる地域や学校間でも意見交流や合同での学習活動が実施できます。

学びの場の拡張

オンライン上の仮想空間を学びの場とすれば、プロジェクト型の学習や地域・企業と連携した活動を行うこともできます。

▶丹後学（令和7年度改訂版）

▶京丹後市地域学習副読本

▶京丹後市文化財保存活用計画

▶京丹後市文化芸術振興計画

【巻末資料】4



（提供）画像：京丹後私立久美浜小学校

2 「探究的な学び」の実現・充実の基盤① ～ 個・集団のアセスメント～

現在の特別支援教育では、子どもたちが生活や学習の中で直面する困難について、様々な情報やデータをもとにその要因となるものを仮説し、支援の必要性や指導・支援の方向性を見極める「アセスメント」が重視されています。

こうしたアセスメントの考え方を、特別支援教育という枠にとどめることなく、「探究的な学び」のプロセスをはじめとする様々な保育・教育場面で意識・活用していくことで、すべての子どもたちに「資質・能力」という汎用的な力をより一層確実にはぐくんでいくことが可能となります。

★アセスメントの考え方を「学習活動」に取り入れてみると...【読み替え(例)】

- 発達状況や特性を把握
→ 学習状況を把握
- 困難さの要因を仮説
→ 今の学習状況につながるつまづきの要因を仮説
- 合理的配慮等の支援を実施
→ 仮説した要因に合わせて授業をユニバーサルデザイン化
- 特別な教育課程の編成
→ 「指導の個別化」の実施

多様な子どもたちの包摂

通常の学級においても、多様な個性や特性を有する児童生徒が一定数に籍している実態が明らかになっています。
このような状況を踏まえ、多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を引き出す教育の実現が求められています。

多様な児童生徒（例）



(出所) 画像：NITS独立行政法人教職員支援機構

3 「探究的な学び」の実現・充実の基盤② ～ 安心できる居場所づくり～

「探究的な学び」をより主体的・協働的な活動として進めるためには、子どもたちが安心して自分の考えを表現し、互いに学び合える環境が不可欠です。一人ひとりの個性やニーズ、そして集団の特徴を理解し、受け止めながら、心理的安全性の高い学級・学校をつくることで、子どもたちの「やってみたい」「もっと知りたい」といった探究心が引き出されます。

- (1) 一人ひとりの持ち味を生かし、誰もが活躍できる学級・学校づくり
 - ・子どもたちの多様な強みや特性を尊重し、それぞれが役割をもてる機会を創出
 - ・すべての子どもが「自分はここにいていい」「明日も来たい」と思える環境づくり
- (2) 心地よい空間づくりによる安心感の醸成
 - ・物理的な環境だけでなく、子どもたちの心の状態に配慮した落ち着いて学びに向かえる環境の整備
 - ・快適で温かみのある教室・学校環境づくり
 - ・各中学校配置の「心の教室相談員」を中心とする校内フリースクールの充実
- (3) いじめや暴力などへの組織的な対応
 - ・いじめや暴力などの未然防止に向けた学校全体での取組と魅力ある授業づくりの推進
 - ・心や身体を傷つける行為や集団の学びを後退させる言動に対する組織的な方針立てと毅然とした対応

▶ [「生徒指導提要」\(令和4年12月文部科学省\)](#)

★活動する子どもたちのそばに足を運び...

- ・表情や態度、行動を観察
- ・つぶやきを拾う
- ・個々の感情や集団の空気感を感じ取る

★欠席管理(連続3日・月3日を目安に)の徹底
★教職員みんなですべての子どもを「みる」
(見る・観る・視る・診る・看る)



(提供) 画像：京丹後市立島津小学校

§ 4 保幼小中一貫教育の枠組みの効果的活用

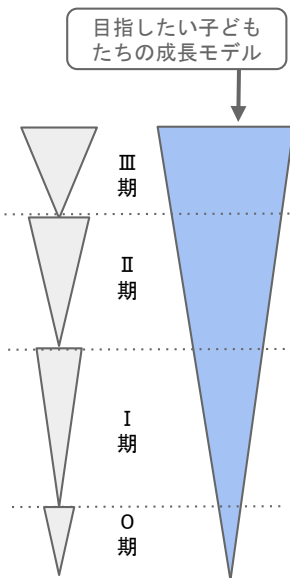
全市展開11年目を迎える保幼小中一貫教育は、校種間の接続の改善だけを目的に行ってきたものではありません。指導の適時性と指導の一貫性を追究し、一貫教育により教育内容の質を向上させることをねらってきました。

こうした一貫教育の枠組みは、本市が重点化する資質・能力が短期間の指導で身に付くものではなく、「探究的な学び」を様々な教育・保育活動で繰り返し行うことで身に付くものであるからこそ、さらに重要なものとなり、効果的に活用していく必要があります。▶「保幼小中一貫教育推進基本計画」（京丹後市教育委員会）

1 幼児期からの一貫した系統的な学び

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した「環境構成」が重視される幼児教育では、幼児に対する理解に基づき、幼児の心が揺り動かされる環境や、やりたいことに夢中になれる環境が幼児とともに創造されたり、活動の流れや心の動きに即して、常にその環境が適切なものとなるよう、柔軟に再構成されたりします。乳幼児はこのような意図をもって計画的に構成された環境の下、好奇心や探究心をもって遊びを展開する中で、気付いたり、工夫したり、試行錯誤を繰り返したりするなど困難や葛藤も含めた過程を通じ、考える力、課題を解決する力、人と関わる力、伝え合う力、やり抜く力など「学びの芽」をはぐくんでいきます。この「学びの芽」を、「架け橋期」をはじめとする校種・各期の接続時には、それまでに身に付けた力をリセットすることなく、次のスタートの基盤とし、充実から発展へと進め、10年間の保幼小中一貫教育を連続的・系統的な学びにします。

※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は達成目標ではありません。こういった姿に成長してほしいという方向性です。



2 学園運営協議会の機能化による 学校・地域の連携・協働体制の強化

本市の重点である「グローバル人材育成」に向けた各学園・学校園所の取組をより効果的に進めるためには、保護者や地域、企業との目標共有や連携・協働体制の構築が重要です。その際には、「自ら考える力・主体性をはぐくむために、会話や人とのつながりを大切に」という思いを関係者で共有し、対話を積み重ねる中で、子どもを育てる環境づくりを進めていくことが大切です。

- (1) 各学園の「学園目標」や「目指す子ども像」を学校園所・保護者・地域・企業で共有し、一体となって地域子どもたちをはぐくんでいきます。
- (2) 学園運営協議会での熟議のテーマを工夫し、保護者、地域の方々と「探究的な学び」の充実に向けた地域教材・人材の開拓をより一層推進します。
- (3) 「探究的な学び」を具現化するため、地域の産業や文化、歴史に触れる機会を充実させていきます。

こうした豊かな学びを確保することは、そこに関わる大人たちの成長も促し、ひいては地域の絆を強め、地域づくりの担い手を育てていくことにつながります。

学校教育

京丹後市総合計画

施策02 未来を拓く学校教育の充実

<目指す目標指標名>

- ①全国学力・学習状況調査の各教科の平均正答率
- ②前学年までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた割合
- ③学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、友達と考えを共有したり比べたりしやすくなると思う割合
- ④地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う割合
- ⑤先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う割合
- ⑥不登校の児童生徒のうち、学校内外の機関等で専門的な相談指導を受けていない人数

*①～⑤については全国学力・学習状況調査及び児童生徒質問調査の数値

(目標値：全国平均以上)

*⑥については児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査での回答

(目標値：0にする)

授業改善／資質・能力の向上

本市が目指す教育（「探究的な学び」をととしたグローバル人材の育成）の実現に向けた授業改善・研究活動をより一層推進するため、「学びのパスポート」の質問調査から「主体的・対話的で深い学び」・「探究的な学び」に関連する項目を抽出し、分類した。 ※現状把握のためのデータ・取組立案の根拠・授業評価の指標などに結果を活用

◆主体性

調整力

- 13 自分で計画を立てて学習をしている。
51 はじめに目標やゴールを決めてから計画を立てるほうだ。

ねばり強さ

- 48 難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。
52 失敗してもあきらめずに何度も挑戦するほうだ。

◆丹後学のねらいの達成

地域への愛着

- 27 今住んでいる地域の自然や歴史について関心がある。

自己の生き方・在り方

- 22 将来の夢や目標をもっている。

◆探究的な学びの質

課題解決過程をととしたマインド変化

- 20 学級のみみんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。

◆設定する探究課題の適切さ

汎用的な力の育成度

- 5 授業で学んだことは、身のまわりのできごとや日常生活に活かせることが多い。

◆対話

価値理解

- 43 人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることもある。
45 自分の考えたことよりも、相手の方がよい考えを持っていると感じたときは、相手の考えを取り入れるほうだ。
92/98 学習するときに、ICT端末を使うことで、ほかの人と意見や考えを共有しやすい。

◆課題解決の育成度

多角的思考

- 30 自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。

解決意欲

- 31 わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。

柔軟な思考・目的意識

- 33 目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。

情報収集

- 35 分らないところがあると本やインターネット、テレビなどをみたり人に聞いたりして調べる。
36 調べたいことについて納得がいくまで調べる。

参考資料

- 1 ■ グローバル人材を育てるために
- 2 ■ 「話す力」から「つながる力」へ
- 3 ■ Kyotango Sea Labo
- 4 ■ 京丹後市が定義する探究的な学びのプロセス
- 5 ■ 児童生徒の多様性を包摂する必要性
- 6 ■ 誰ひとり取り残されない学びの多様化プラン
- 7 ■ 不登校児童生徒に対するICT等を活用した支援について

グローバル人材を育てるために

The Development of Global Leaders in Kyotango

京丹後市教育委員会では、未来を担う子どもたちが「地域を起点に世界ともつながりながら、課題を解決する力」を身に付けられるよう、グローバル人材の育成に取り組んでいます。この取組をとおして、急速に進むグローバル化や多様化の中でも、地域の特性や価値を大切にしながら、広い視野と実践的な能力を備えた次世代を育てていきたいと考えています。

具体的には、次の3つの資質・能力の育成を目標としています。

問題解決能力



主体的に問題を発見し、その解決方法を考え、実行に移し、振り返って次の問題の発見・解決につなげる力

子どもたちが「未来を創る主役」として活躍するための基礎となります

多様な他者と協働する力



異なる背景をもつ人々と共に学び、共感し合いながら共通の目的に向かい、今まだないものを創り出そうとする力

子どもたちが自分のアイデンティティを大切にしながら、多文化共生の中で主体的に生きていくための基礎となります

コミュニケーションツールとしての英語運用能力



英語で考え、伝え、対話する力を育み、子どもたちが地域と世界をつなぐ架け橋として活躍できる力

その基盤となるコミュニケーション能力を発達段階に応じた言語を中心にすべての教育活動をとおして育成します



グローバル人材を育てるために ~The Development of Global Leaders in Kyotango~



※写真はイメージです

0期 就学期 → **I期 基礎期** 小学1～4年 → **II期 充実期** 小学5年～中学1年 → **III期 充実期** 中学2～3年 → **高等学校1～3年生** → **成人（学生）～高齢者**

問題解決能力



多様な他者と協働する力

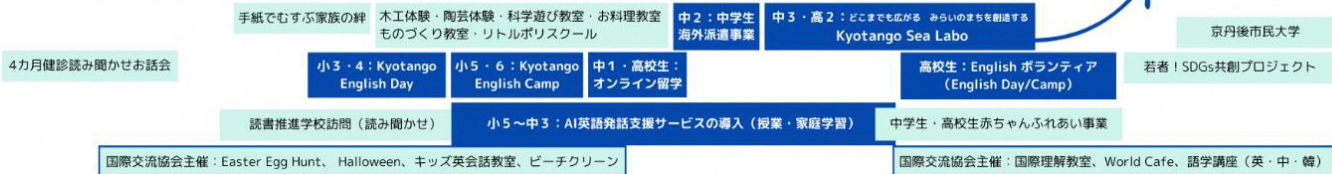


コミュニケーションツールとしての英語運用能力



関連する京丹後市の主な事業

0期 就学期	I期 基礎期 小学1～4年	II期 充実期 小学5年～中学1年	III期 充実期 中学2～3年	高等学校1～3年生	成人（学生）～高齢者
<p>好奇心を育む</p> <p>遊びや日常の中で「不思議さ」や「おもしろさ」に気づき、興味や関心を持つ。 自然や身近な物事に触れながら、考えたり試したりする楽しさを体験する。</p>	<p>探究心を広げる</p> <p>学習や日常生活を通じて、興味や関心の幅を広げ、知的好奇心を高める。 物事を自ら観察し、質問を投げかけ、学びのきっかけをつくる力を身に付ける。</p>	<p>論理的に考える基礎を築く</p> <p>興味や関心のある事柄について調べ、得た知識をもとに自分なりの考えをもつ。 学んだことをさまざまな視点から整理し、筋道を立てて考える基礎的な思考力を身に付ける。</p>	<p>論理的に問題を解決する</p> <p>得られた情報や知識を分析・統合し、論理的に考える力を発展させ、課題の本質を捉え、具体的な行動計画を立てて問題解決に取り組む。</p>	<p>新しい価値を創造する</p> <p>社会や地域の課題を主体的に見つけ出し、多角的な視点で解決策を提案する力を身に付ける。 地域や社会に積極的に関わり、自分の考えを行動に移し、問題解決を通じて持続可能な未来を見据えた取組を行う。</p>	<p>地域と社会の課題に貢献する</p> <p>豊かな自然環境、多彩な産業、先端技術が調和する地域社会の課題解決に参画し、幸福な社会の実現に寄与する。 長期的な視点で物事を捉え、社会に対する責任を果たしながら次世代につながる新しい価値を共創する。</p>
<p>共感を育む</p> <p>身近な人との触れ合いや遊びを通じて、相手の気持ちに共感する。違いを発見する体験を通じて、多様な価値観への興味をもつ。</p>	<p>協力を学ぶ</p> <p>共通の目標に向かって仲間と助け合い、協力を楽しさを知る。簡単な約束やルールを守ること、集団での役割を理解する。</p>	<p>多様性を認める</p> <p>異なる背景や価値観をもつ人々の考えや個性を認め、尊重する態度を身につける。 集団の中で自分の役割を果たしながら、他者とともに高め合う経験を積む。</p>	<p>社会とのつながりを築く</p> <p>地域や社会の一員としての役割を自覚し、多様な人々と協働して課題解決策を考える。 社会における不公平や問題に気づき、具体的な行動を通じて自分の考えを示す。</p>	<p>主体的に社会に関与する</p> <p>自分の在り方や生き方を考察しながら、他者や社会との関わり方を主体的に選択する。 地域や国際社会の課題に向き合い、多様性を受け入れながら行動を通じて社会に貢献する。</p>	<p>京丹後市人権教育 - 啓発推進計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 共生社会の実現に向けた人権教育・啓発 一人ひとりを大切にしたい人権教育・啓発 障害学習としての人権教育・啓発 自分のこととして考える人権教育・啓発
<p>伝える力</p> <p>自分が見たり感じたりしたことを、言葉や身振りで相手に伝える楽しさを体験する。</p>	<p>自分の経験や考えを整理し、簡単な言葉や表現を用いて、相手に伝える。</p>	<p>物事の背景や理由を考えながら、自分の意見や気持ちを分かりやすく伝える。</p>	<p>根拠を明確にし、相手に納得してもらい、自分の主張や考えを表現する。</p>	<p>多様な情報を収集・分析し、論理的かつ説得力のある形で発表や議論を行う。</p>	<p>Kyotango Sea Laboの一場面</p>
<p>英語運用能力</p> <p>ことば（日本語・英語・他の言語）に親しみ、音やリズムを楽しむことで、言葉への興味をもつ。</p>	<p>自分の経験や考えを整理し、簡単な言葉や表現を用いて、相手に伝える。</p>	<p>簡単な英語を用いて、自分のことや日常的なできごとを紹介したり、相手と自分の思いや考えを伝え合ったりする。</p>	<p>英語を使って、自分の考えを意図や根拠をもって伝えたり、相手の意見を理解しながら意見交換を行ったりする。</p>	<p>英語で、自分の意見やアイデアを論理的に発信したり、多様な視点を踏まえ、新たな価値を生むために他者と話し合ったりする。</p>	



グローバル人材に求める3つの資質・能力を育成するため、英語教育の充実や海外派遣事業、多文化理解のための交流活動など、多様な学びの場を提供しています。また、地域の特性を活かしながら、子どもたちが「地域で学び、地域から世界へつながる」経験をえられるよう努めています。

市民のみなさまのご理解とご協力を得ながら、子どもたちがこれからの社会で必要とされる力を身に付け、地域に誇りを持ち、世界で活躍できる人材に成長する環境を整えてまいります。

英語でつながるワクワクを仲間とともに体験する
Kyotango English Day



小学3・4年生対象

小学校での中学年外国語活動の学びを基盤に、ALTを中心としたネイティブスピーカーと触れ合い、英語でコミュニケーションをとる楽しさを感じたり、英語学習への興味・関心を高めます。

高校生ボランティア

京丹後から世界にまちの魅力を発信する
Kyotango English Camp



小学5・6年生対象

ALTを中心としたネイティブスピーカーと英語で京丹後市の魅力を伝え合う機会を提供します。英語がコミュニケーションツールとして果たす役割や学ぶ意義を理解し、コミュニケーションの楽しさや関心を高めることを目的としています。

高校生ボランティア

多文化交流で視野を広げ海外の友だちとつながる
オンライン留学



中学1年生対象

海外の生徒とのオンライン交流を通じて、子どもたちが京丹後市の魅力を再発見し、外国の文化や生活に触れることで視野を広げる機会を提供します。さらに、交流を通じて自身の英語力の向上を実感し、英語学習への意欲を高めることを目的としています。

高校生参加対象事業

海外を舞台にフィールドワークをする
中学生海外派遣



中学2年生対象

現地の学校での留学体験や一般家庭での生活体験の機会を提供します。4か月に渡る事前研修と現地での8泊9日間のプログラムを通じて、日本のよさや自分らしさを再発見し、将来の学びやキャリアへの意識を高めることを目的としています。

まちの持続可能性を探究する
どこまでも広がる
みらいのまちを創造する
Kyotango Sea Labo



中学3年生対象

「デザイン思考×STEAM教育×SDGs」の教育プログラムのもとに、京丹後市の素材を生かし、人間中心の発想プロセスをとおして、未来のまちをデザインする次世代型リーダーの育成を目指しています。

高校生参加対象事業



世界とつながる英語力を育む！
AI英語発話支援サービス

市内の小学5・6年生および中学生全員に教材を配信し、言語活動を中心とした授業を通じて英語の実践的な活用を促進します。学校の教育課程内の学びを充実させることで、「自分の思いや考えを英語で自信をもって発信できる生徒の育成」を目標とし、将来、世界で通用する英語力の向上を支援します。



「話す力」から「つながる力」へ！

～英語で未来を拓く3年間～

World
Masters
Games
2027
Kansai

R9

おもてなしチャレンジ！～英語でつながる、地域で輝く～

言葉の壁を超えて人とつながる「わくわく感」を肌で感じ、英語を通じた貢献が、子どもたち自身の幸福感（ウェルビーイング）と、生涯学び続ける自信へとつながる集大成の年にします

全国学
力・学
習状況
調査
(英語・
話すこ
と調査
実施年)

R8

見せよう！話せる力～全国調査で自信の一步を～

全国学調等の成果を「できる」という実感につなげ、学びに対する自己肯定感を高めます。AIに基礎練習を委ねることで生まれた時間を活かし、教師と生徒、あるいは生徒同士が英語で深くやり取りする「生きた対話」の場を最大化します

WMG準備年

中学年外国語活動
高学年外国語科
そして

中学校英語科へ学びをつなぐ

AI英語発話支援サービスという

力強いパートナーを賢く使いこなし、

子どもたちが自分の言葉で未来を拓き、

笑顔でおもてなしできる『本物の対話力』を

共に育てていきましょう。

授業づくり、学習課題の創意工夫が、

子どもたちの「伝わった！」という自信につながります。

AI英語
発話支
援サー
ビス
小学5年
～
中学3年
活用
開始

教育課程内で海外の学校と
オンラインで交流
(ベトナム、台湾、インドネシア等)

R7

スタートアップ！～「話したくなる」教室づくりをはじめよう～

令和7年度は、“英語運用能力育成”の（再）スタートライン。

令和4年度から活用してきたAI英語発話支援サービスの活用を

小学5年生～中学3年生までに拡充し、児童生徒の“言ってみよう”“伝えたい”を引き出し、自分の思いや考えを英語で伝え合う授業を目指します

地域の未来をつくる、中高生のための探究プログラム

Kyotango Sea Labo

地域の魅力や課題を学びながら、子どもたちが

“自ら考え、挑戦し、未来をつくる力”を育てる

5日間の特別な学び

Kyotango Sea Labo とは？

Kyotango Sea Laboは、将来グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、地域課題に挑む京丹後市の中高生を育成する探究型のSTEAM教育プログラムです。

中高生は地域で活躍する大人たちを“パートナー”として、大学生・大学院生のサポートのもと、英語を活用して探究活動に取り組みます。

本プログラムは、スタンフォード大学・トロント大学の現役研究者が設立した一般社団法人SKY Laboと京丹後市教育委員会の共同開発による、実証に基づいたカリキュラムで運営されています。

5日間で身につく3つのチカラ

① 地域の“リアル”に触れ、視野が広がる

地域で働く大人に直接インタビュー。
学校では聞けない本音や使命感に触れることで、地域の未来を考える視点が育ちます。

② 思考力・発信力がぐんと伸びる

自分で問いを立て、調べ、考え、形にし、
英語でプレゼンすることで、
総合的な表現力が身につきます。

③ 挑戦する姿勢が育つ

SKY Laboの3つのマインドセット
「Think outside the box」「Give it a try」「Fail forward」
を体験的に学び、失敗を恐れず挑戦できるようになります。

参加者の声

大人や大学生と話しながら考えることで自分の視野が一気に広がった。(中学生)

英語で発表する経験を通して、挑戦することへの自信が生まれました。(高校生)

若い世代の視点に刺激を受け、地域の可能性を感じた。(地域の大人)

Kyotango Sea Labo

3つの学びのキーワード

01

デザイン思考

デザイン思考とは、解が一つでない時に、
ヒトを中心に課題を発掘し、問題解決する発想法です。

プログラムの一例



インタビュー
地域で活躍する大人に話を聞きます



ニーズの追究
その人の話の中から“潜在的な課題”を洗い出します



プロトタイプ
問題を解決する方法を
かたちで表します



フィードバック
大人から案に対する
意見をもらい修正します

最終案

02

問題解決能力

自分で問いを立て、調べ、考え、形にしている
学び方(探究的な学び)によって、問題解決
を目指します。
答えが決まっていない問いだからこそ、
「なぜ?」「本当はどうなんだろう?」と考
える力が伸びます。

SEA LABOでは、地域の現場で活躍する大人を
インタビューし、話の中から“潜在的な課題”
を見つけ、解決に向けて動きます。
教科書では得られないリアルな学びが待っ
ています。

03

英語

SEA LABOでは、プロトタイプの発表などに英
語を取り入れています。

それは、“世界に向けて自分の考えを伝える
力”を育てるためです。
これからの社会では、地域のことを考えるとき
も、海外のアイデアや人とつながることが当たり
前になります。だからこそ、自分の意見をシ
ンプルに、相手に伝わる言葉で表現する力がと
ても大切です。

SEA LABOの英語は「テストのための英語」で
はなく、未来に向けた実践的なコミュニケー
ションの力として使います。

協力事業者さま一覧 (2022~2025年) ※順不同、敬称略

田原興業株式会社 / ヒロセ工業株式会社 / 株式会社U設計室 / 社会福祉法人みねやま福祉会 / 株式会社日本水産 / 丹後織物工業組合 / 株式会社Sazae Japan / 木下酒造有限公司 / 余根田 直樹 / 株式会社エーブル / 有限会社芳賀製作所 / 株式会社日進FULFIL / 小野基味増醬油醸造株式会社 / たつたぎ / 株式会社自然耕房あおき / 株式会社サブスパイア / 京都市立芸術大学 / 株式会社積産 / 株式会社オンチュウ / YAMAUKAWA FARM / 株式会社津川 / 210artworks / 高・五箇サウナ / 株式会社Enuncia / 株式会社興和 / 京丹後舞臺輪藻蒸留所 / シーズファーム株式会社 / scene / 京丹後経済新聞 / 株式会社あしあと

京丹後市教育委員会

0772-69-0620

ご不明な点は、お気軽にお問い合わせください。(担当:上田、戸田)

Kyotango Sea Laboに込める思い
未来をよりよくするために動き出した生徒が
現状を変える力があることへの自信を高め
失敗を恐れず、自分から動いて、周りに影響を
与えらる人
地元企業といっしょによりよい京丹後市の未来を
試行錯誤して創ることで



高校生
×
地域の大人
×
大学生



京丹後市の定義する探究的な学びのプロセス

問いから始まり、自己を変容させる学びの深化スパイラル

「問い」から始まる
課題を設定する

探究的な学びは、単なる情報の収集ではありません。それは「なぜ?」「どうすれば?」という問いから始まります。



問いに対して、納得のいく答えが出せたか?



見通しは適切だったか? 自己はどう変容したか?



終わりなき変容のスパイラルへ



Point

収集した情報を思考ツール等で整理・分析する。

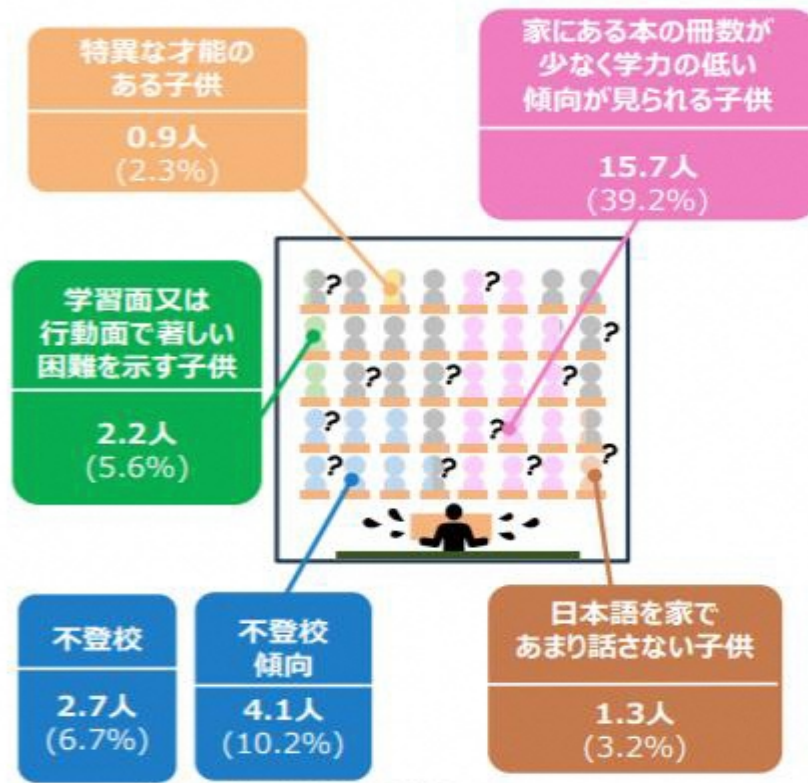
例：
比較・分類・関連付け等

児童生徒の多様性を包摂する必要性(小・中)

小学校 (35人学級)



中学校 (40人学級)

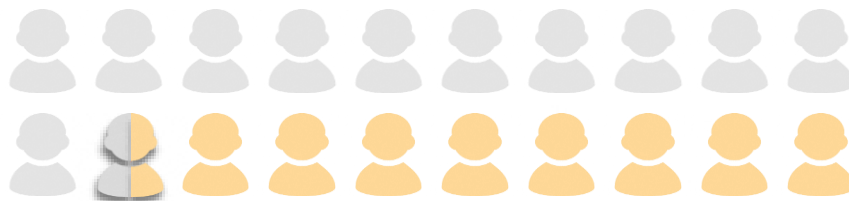


(出所) 画像：文部科学省

児童生徒の多様性を包摂する必要性(小・中)

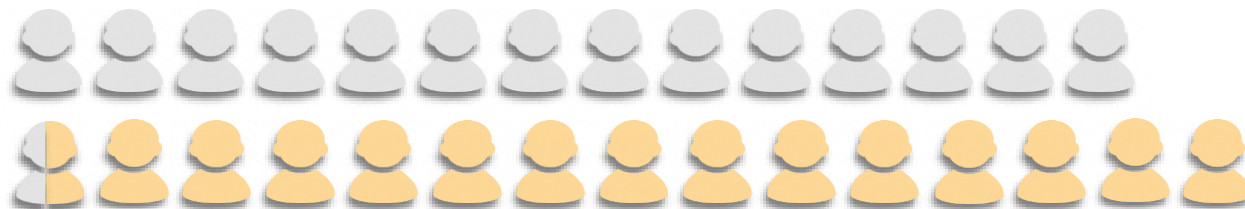
京丹後市 1学級平均人数あたりの要支援・配慮児童数 *(イメージ)

小学校



1学級平均児童数
約20人のうち8.5人

中学校



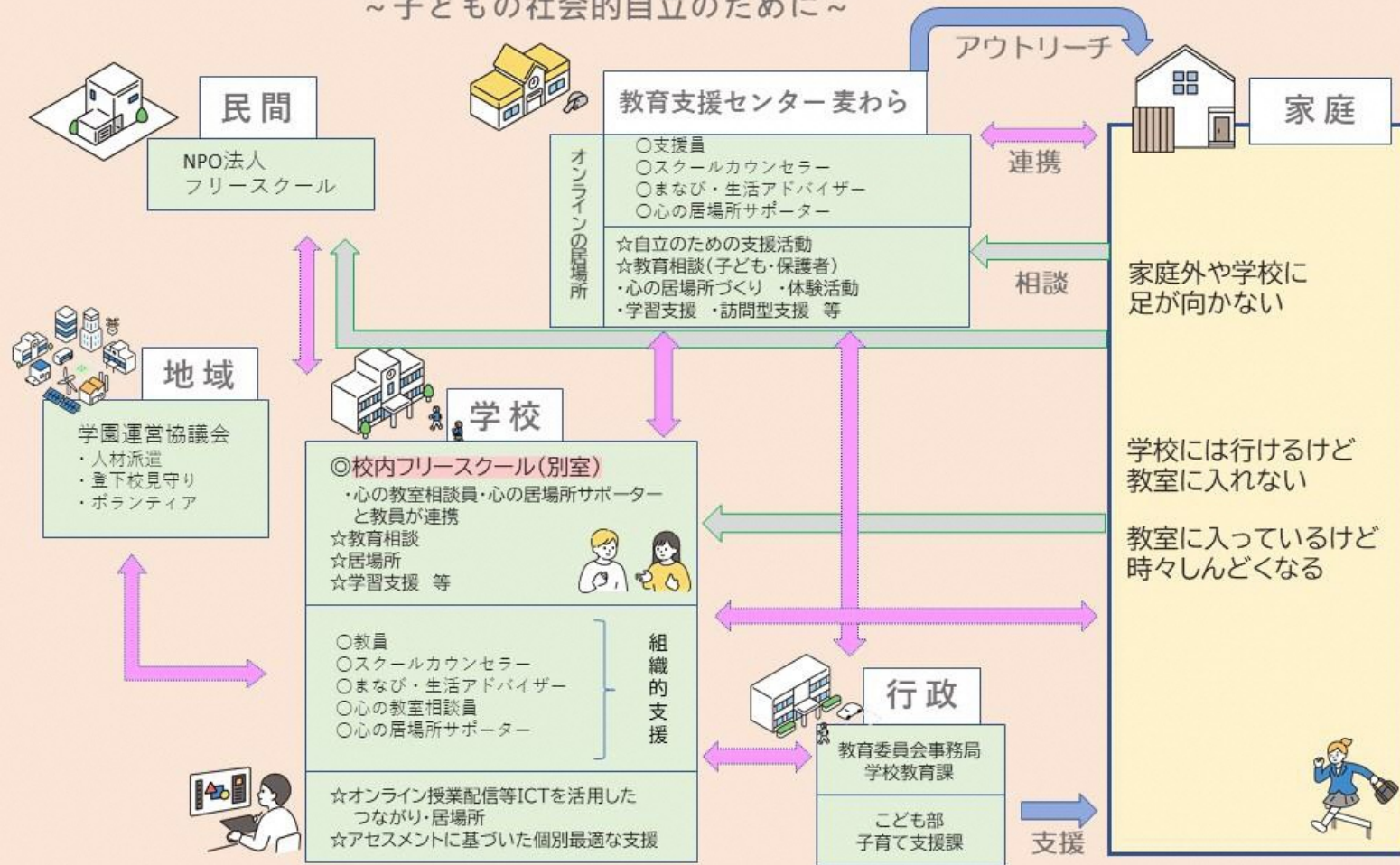
1学級平均生徒数
約29人のうち14.6人

※不登校、ヤングケアラー、特別な教育的支援を要する児童生徒等
実数ではなく、延べ人数 <令和5年度末時点>

誰ひとり取り残されない学びの多様化プラン

京丹後市教育委員会

～子どもの社会的自立のために～





～子どもの社会的自立のために～ 校内フリースクール（仮称）



校内フリースクール（仮称） ※名称については各校で検討

学校には行けるけれど自分のクラスに入りづらい児童生徒などが、学校の空き教室等を活用し、多様な学びを実現する。先生に気持ちを聞いてもらったり、自習をしたり、自分のクラスとオンラインでつないで学習するなど、個に応じた柔軟な支援を行う。

01

各中学校に心の教室相談員を1名配置

1日をとおして校内フリースクール（仮称）を担当する。児童生徒の相談にのったり、気持ちを聞いたり、様々な学習や取組の支援・補助を行う。

教員と連携し、児童生徒のアセスメントや支援方法を共有し、教育相談部会等にも参加する。

校内フリースクールで過ごす児童生徒がいない場合は、各教室等において不登校傾向にある児童生徒や支援の必要な児童生徒等、学校の状況に応じた支援を行う。



02

多様な学びの場・居場所としての環境面の整備

これまでのような、机と椅子が配置してあるだけの別室ではなく、多様な学びの場・居場所としての校内フリースクール（仮称）であるために、他を気にせず学習するためのパーテーションによる個別の学習スペースの確保やオンラインでの授業や取組のためのICT環境の整備、また、コミュニケーションのサポートとなるツールやグッズの整備など、各校の実態に応じた校内フリースクール（仮称）環境を整える。

03

チーム学校による支援

担任や管理職、学年主任、教育相談主任、養護教諭、スクールカウンセラー、まなび・生活アドバイザーなど、それぞれが専門性を発揮し連携、不登校児童生徒の的確なアセスメントを行い、本人や保護者のニーズも踏まえた上で支援方針を検討し、仮設を立てて実践する。

校内フリースクール（仮称）での取組や学習の状況を、積極的に通信簿等の個人内評価にも反映する。



04

様々な関係機関との連携

保護者との連携を密に行うとともに、市教育委員会やこども部こども未来課、教育支援センターまわらなど、児童生徒の状況に応じた様々な機関との連携を行い児童生徒を支援する。

教育支援センター通所の児童生徒の次のステップとして、校内フリースクール（仮称）での学びが考えられる。ケースによっては教育支援センター支援員と協働した支援も行う。

不登校児童生徒に対するICT等を活用した支援について

令和4年4月
京丹後市教育委員会

1 はじめに

今まで不登校児童生徒に対して、学校や教育支援センターなどの関係機関と連携し、児童生徒や保護者に寄り添った支援を行ってきた。しかし、不登校に至る要因の多様化・複雑化に伴い長期にわたる欠席だけでなく外出もままならない等、学校内外の居場所に繋げる支援が困難なケースも増加している。

現在、一人1台端末等のICT環境の整備に伴い、不登校児童生徒が、学校や社会と繋がることができる一つのツールとしてICTを活用することが可能となった。そこで、現在各校で不登校児童生徒に対し行っている支援とともにICT等を活用した支援を推進する中で、学校(社会)や人となつがる経験を通し、不登校児童生徒の社会的自立を目指すものとする。そのためには、不登校児童生徒を丁寧に見立てた上で、個別の状況に応じた支援ができる環境を整備することが求められる。児童生徒が不登校の状況にあっても学校と繋がりが、きめ細やかな支援が継続できるよう、「不登校児童生徒に対するICT等を活用した支援について」の見直しを図りながら、不登校児童生徒へ支援をさらに充実させていくこととする。

2 基本的な考え

校長が、不登校児童生徒の状況や、本人・保護者の希望も勘案し、社会的自立に向けた支援・指導を進める上で、有効・適切であり、かつ、次の要件を満たすと判断できる場合は、ICT等を活用した支援・指導を行うことができることとする。またその支援・指導日数のうち、校長の認める日数を指導要録上出席扱いとすることができることとする。

3 対象

- (1) 学校の支援計画のもと、ICT等を活用した支援・指導が有効・適切であり、かつ、「4 要件」を満たすと判断される「不登校」を理由としている児童生徒であること。
- (2) 但し、指導要録上の出席扱いとする場合は、(1)とともに基本的に他の*注1**公的機関や民間施設において相談・指導を受けられない児童生徒であること。**

4 要件

- (1) 社会的自立に向けた支援・指導の一環として実施すること。
- (2) 保護者と学校との間に十分な連携・協力関係が保たれていること。また、保護者に支援・指導内容について定期的に情報提供がなされること。
- (3) 定期的に*注2訪問等による対面指導が適切に行われていることを前提とすること。
- (4) 学習活動は、児童生徒の学習の理解を踏まえた計画的な学習プログラムであること。
- (5) 学校がアセスメントに基づいた支援計画を作成し保護者及び本人の同意を得た上で、支援・指導をすすめること。**実施後の状況は、月例報告に記載すること。**
- (6) オンラインで活用する場合は、原則家庭にWi-Fi環境が整っている児童生徒であること。
但し、*注3**就学援助世帯(準要保護)**には、通信費の支援または市のルーターを貸し出すことができる。

5 ICT等を活用した支援の内容

- (1) ICT機器を活用し、在籍校の授業を自宅や別室等に配信して行う学習
- (2) 放課後等の学習補習や相談
- (3) タブレットの中にある学習支援ソフト等を活用した学習
- (4) 学校で使用している教材を活用した学習
- (5) 民間業者が提供するICT教材を活用した学習(郵送や電子メール、FAX等を活用して提供されるものも含む)

6 評価について

- (1) 学校が把握した当該学習の計画や内容が、その学校の教育課程に照らし適切と判断されること。
- (2) 評価については、事前に学校と児童生徒・家庭で了解を得ること。
- (3) 児童生徒の学びを様々な角度からできる限り肯定的に評価するものとする。
- (4) 指導要録や通知票に反映するもの、一部の観点についてのみ評価に加味するもの、学習状況を文章評価するもの等、児童生徒の状況に応じて柔軟且つ積極的に評価していく。
- (5) 不登校児童生徒や保護者に学習状況や学習活動の成果を伝え、次年度以降の指導にいかしていく。
*出席扱いとした場合必ずその成果を評価に反映しなければならないわけではない。

7 留意点

- (1) 学校の教育活動内でのICTを活用した支援・指導は、学校が配布しているタブレットを使用するが、民間業者が提供するICT教材を活用する場合はその限りではない。
- (2) 支援を受けている児童生徒の気持ちに寄り添い、定期的に支援計画の評価と見直しを行う。
- (3) ICT等を活用した支援を受ける場所は、学校(自教室以外の別室等)、家庭、教育支援センターとする。
- (4) 対面指導については、在籍校の教員、SC、SSW、教育支援センター指導員等が行うものとする。
- (5) 出席扱いをした場合は、指導要録・出席簿等の備考欄に「オンラインでの出席」について明記すること。
- (6) ICT等を活用した学習活動出席扱いとすることにより不登校が必要な程度を超えて長期にわたることを助長しないよう留意すること。

*注1 学校の別室登校や教育支援センターへの通所と併用し、欠席・通所していない日のICTを活用した支援の支援を出席とすることは可能

*注2 対面指導：家庭訪問やon-lineでの学習支援や状況把握、その他の支援相談等

*注3 就学援助世帯への対応：インターネット環境がある準要保護世帯には通信費の支援を行う。
また、整備した日から換算して通信費の支援を行う。
インターネット環境がない期間についてはWi-Fiルーターの貸し出しを行う。
(R4年度から) 但し、貸出ルーターでのオンライン通信教育(民間)等は不可。

【関連通知文等】

- ・不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)
令和元年10月25日付 元文科初等 第698号(文部科学省初等中等教育局長通知)
- ・文部科学省における不登校児童生徒への支援施策
令和3年10月6日(不登校に関する 調査研究協力者会議資料)